FREE PAPER あさクリ
ASANO CLINIC IN SOJA
年をとっても
病を持っても
今を生きる
暮らしの支援をする情報紙
No.47 02 2020

認知症

認知症を「ニンチ」と略したり、「ニンチが進んだ」などと間違って使っていませんか?
認知症の症状やその方の気持ちについて理解を進めていくことは、認知症の診断を受けているご本人にも、その周りの方のためにもなっていくと私たちは考えています。

DEMENTIA

認知症のことは「認知症の本人」が教えてくれる。

認知症という言葉は、社会的な広がりが進み、普段の生活の中で見聞きすることが多くあります。その中には、高齢者の交通事故の報道など、マイナスなイメージを持ってしまうものも少なくありません。しかし、最近では、認知症と診断を受けているご本人が、ご自身の認知症の事や経験をテレビやラジオ、本、講演会などでお話しをされる機会も増え、認知症に対する誤解や偏見が少しずつ減ってきていると感じています。医療の現場でも変化が起きており、**近年、「認知症のご本人のことを理解し寄り添う」ことが重要視**されています。理解し、寄り添うためには、認知症の方がどのようなことを考えているのかを知る必要があります。

「認知症のことは、認知症のご本人が教えてくれる」と私たちは考えています。少しだけですが、書籍より認知症の方がどのように思っているかをご紹介いたします。

- **認知症になってもできることがたくさんあると思う。**
- **これから今まで以上にやりたいことを見つけてがんばっていきたい。**
- **「認知症の人」は普通の人です。**
- **出来ることをうばわないで、出来ないことだけサポートして!!**

書籍「認知症になっても人生は終わらない〜認知症の私が、認知症のあなたに贈ることば〜」(著:認知症の私たち 株式会社harunosora)より

ご相談の時に認知症のご本人からよくお聞きすること

- **もの忘れがある。**
- **判断が衰えた。**
- **時間や場所がわかりにくくなった。**
- **怒られることが増えた。**
- **不安が多い、元気がでない。**
- **自分だけに聞こえる音があり、怖い、うるさい。**

上記は、認知症のご相談の時に、よくお聞きする内容の一部です。例えば、道がわからない時。大きな店で買いたい物の売り場がわからない時。トイレの場所がわからない時。そんな時、みなさんはどんな気持ちになり、どう声をかけてもらえると安心しますか。認知症についても同じです。もの忘れを指摘されるとどんな気持ちになり、どう言葉をかけてもらうと嬉しいでしょうか。「何かおかしいな」という事に、一番最初に気づいているのは実はご本人なのです。このようなことを想像するだけでも、認知症に対してのイメージが少しずつ変わっていくのではないでしょうか。

院長の認知症コラム COLUMN 「認知症と医師」

認知症研究の第一人者であり、自らも認知症になった医師の長谷川和氏は、2017年に自ら認知症であることを公表されました。ご本人とご家族を追った記録はNHKスペシャルでも放送され話題となりました。現在も医師と患者双方の立場から、認知症への正しい理解を伝えています。あさのクリニックでも一人ひとりの気持ちを大切に、寄り添う姿勢を大切にしています。